

古今往来

多賀城人物伝



大野東人

(? ~ 742)

おおののあずまひと

大野東人は多賀城を創建した奈良時代前半の武人
で、多賀城碑にもその名が刻まれています。

東人は、壬申の乱で活躍した大野果安の子として生まれ、武人であった果安の子らしく、和銅7年(714)、騎兵を率いて新羅の外交使節を出迎えたという記事で、初めて記録に登場します。

神亀元年(724)、東人により多賀城が築かれましたが、この年には海道(太平洋沿岸)の蝦夷が反乱し、陸奥国の官人が殺害されるという事件が起きています。直ちに藤原宇合を大將軍とする征討軍が派遣され、反乱の鎮圧にあたっていますが、征討軍の中に東人の名は見えません。しかし、後の征討に対する叙勲の際にはその名が見えることから、征討軍の要職についていたようです。

天平9年(737)には按察使兼鎮守府將軍として

て東北地方の最高責任者であった東人は、多賀城を拠点に、雄勝村(秋田県)を攻略して城郭を築き多賀城―出羽柵間の連絡路を開こうとします。しかし、

大雪が降るなど作戦は順調に進まず、「城を守るのは人間であり、人を活かすには食糧が必要である。耕作の時期を失えば、何を兵士に給することができようか。さらに兵というものは、利をみて動き、利益がなければ行動しない。それ故、軍を引き上げて一旦帰り、今後を待つて始めて城郭を作ろう」と、多賀城へ引き返しています。東人が、勇猛なばかりでなく、状況を的確に判断できる人物であったことをうかがわせるエピソードと言えるでしょう。

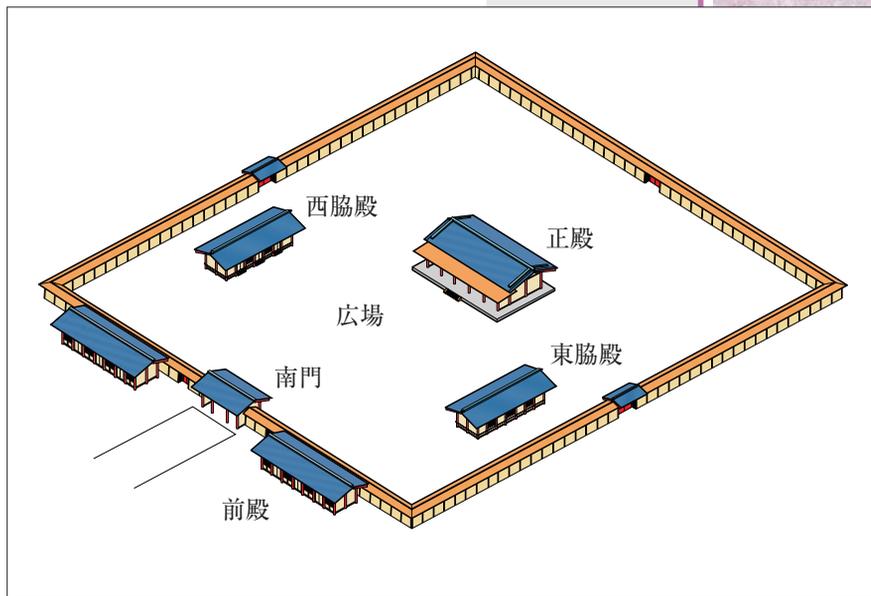
その後、都に戻った東人は参議となりますが、天平12年(740)に九州で藤原広嗣(藤原宇合の子)の乱が起きると、大將軍として1万7千の兵士を率いて鎮圧に

でしよう。

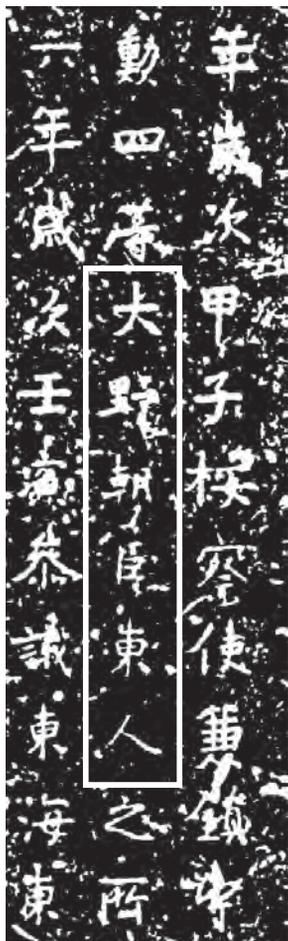
その後、都に戻った東人は参議となりますが、

天平12年(740)に九州で藤原広嗣(藤原宇合の子)の乱が起きると、

大將軍として1万7千の兵士を率いて鎮圧に



多賀城第1期政庁(宮城県多賀城跡調査研究所提供)
大野東人によって創建された政庁です。建物や築地堀はすべて掘立式で、主要な建物には瓦が葺かれていました。規模は東西約103m、南北約116mで、中央に正殿、東西に脇殿があり、南門とこれら建物に囲まれて広場があるという配置は、一貫して変わりませんでした。



多賀城碑文

多賀城碑には東人の官位官職について「按察使兼鎮守府將軍從四位上勲四等」と刻まれています。

向かいます。この乱の影響は大きく、聖武天皇は東人に気を遣いつつも、乱の最中、伊勢方面へ行幸し、平定後も平城京へは戻らず、恭仁京(京都府)に遷都してしまいます。

翌年、東人は平城京の留守官に任じられましたが、天平14年(742)没しました。

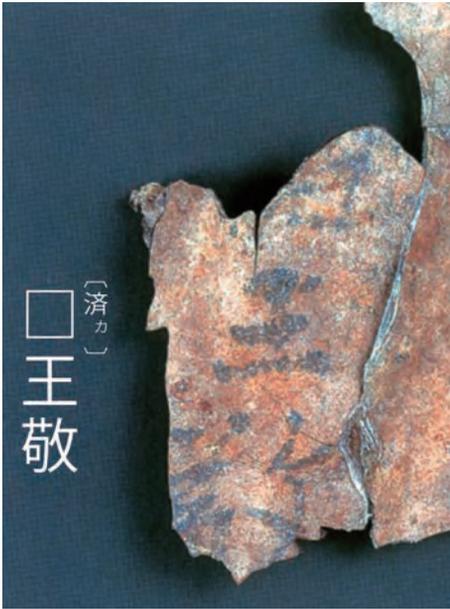
東人は、東北地方の経営に積極的に取り組み、その礎を築いた東北地方の古代史上、最重要人物の一人といえるでしょう。

百濟王 敬福 (697~766)

百濟王敬福は、かつて朝鮮半島にあった百濟国の王族の子孫にあたる人物で、文武天皇元年(697)百濟国最後の王のひ孫にあたる百濟王郎麁の子として生まれました。

敬福は、天平10年(738)陸奥介(陸奥国の次官)として記録に登場します。この時の陸奥守(長官)は、多賀城を創建し、鎮守府將軍の職も兼任していた大野東人でした。その後、天平15年(743)には陸奥守になります。

天平21年(749)陸奥国小田郡(宮城県涌谷町)で黄金が発見されたという知らせが都に届きます。



〔濟カ〕
□王敬

「百濟王敬福」の名前が見える漆紙文書。多賀城市山王遺跡から出土したもので、敬福が陸奥介在任中の天平12年(740)頃の文書と考えられています。

くだらのこにきしきようふく

当時、仏教の力で国を治めようとしていた聖武天皇は、東大寺の大仏建立を進めていましたが、完成を目前にして大仏に塗る黄金が不足してしまい、中国からの輸入まで考えていたようです。そのため、900両

の黄金が献上された時の天皇の喜びは大きく、年号を天平から天平感宝に改めたほどです。これにより陸奥守であった敬福は、位が7階級特進する異例の出世を遂げました。

当時、越中国(富山県)に赴任していた万葉歌人として有名な大伴家持は

すめろきの 御世采えむと東なる
陸奥山に 金花咲く

と黄金発見を祝した歌を残しています。

その後敬福は、橘奈良麻呂の乱では反乱者を勾留し、惠美押勝(藤原仲麻呂)の乱では、仲麻呂によってたてられた淳仁天皇を幽閉する任にあたるなど政治の表舞台で活躍します。

敬福の人柄について記録には「性格は気ままで規則にとらわれず、大変酒食を好んだ。役人や人民がやってきて清貧のことを告げると、その度、他人のものを借りてまで望外のものを与えた。このため、しばしば地方官に任じられても家にゆとりがなく、



万葉歌碑(涌谷町教育委員会提供)
昭和29年、黄金山神社境内に建てられた碑で、万葉集巻18に収められた「陸奥国より金を出せる詔書を賀く歌一首并に短歌」のうちの短歌一首「すめろきの」が刻まれています。

財産がなかった。しかし、その性分は物分りがよく、政治の力量があった」と記されています。

政変・反乱の多かった激動の時代、これらに加担することなく無事生き抜いた敬福は、天平神護2年(766)、69歳で亡くなりました。



黄金山神社

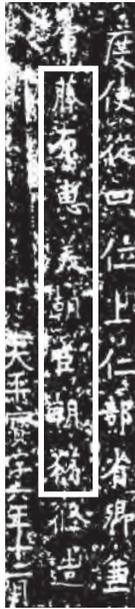
黄金山神社は、日本で始めて金を産出した涌谷町北部の狭い谷間にあり、小田郡の延喜式内社の一つでした。この神社のある一帯が黄金山産金遺跡で、奈良時代の瓦や礎石が発見され、産金を記念した仏堂が建てられていたと推定されています。

藤原朝鴉 (？～764)

多賀城を修造し、多賀城碑に名を留めている藤原朝鴉は、奈良時代の半ば、国の政治の実権を握っていた藤原仲麻呂(惠美押勝)の四男として生まれました。

朝鴉は、橘奈良麻呂の乱後の天平勝宝9歳(757)、陸奥守として初めて記録に登場します。その後、按察使兼鎮守将軍として、東北地方の全権を任された朝鴉は、対蝦夷政策を積極的に進めます。かつて大野東人が意図しながら果たすことのできなかった雄勝城(秋田県)造営を戦わずして成し遂げ、さらに太平洋側においては、桃生城(宮城県石巻市)をつくり、蝦夷にとつて重要な地点を奪うことに成功します。また、多賀城、秋田城を改修し、太平洋側・日本海側それぞれの拠点の強化を図りました。

天平宝字4年(760)正月、これらの功績が認められ、2階級特進した朝鴉は、同年9月、新羅国の使者が大宰府にやってくると、対蝦夷政策の手腕を評価され、使者と接見する外交官に抜擢されました。



多賀城碑文

多賀城碑に見える朝鴉の官位官職は「参議東海東山節度使従四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍」となっており、朝鴉の参議就任の日が、碑の建立年月日となっています。

朝廷では当時、新羅征討の準備を進めており、また、派遣されてきた使者が下級役人であったこと、さらに、しばらく連絡がなく、礼儀を欠いていたことなどから、朝鴉は強硬な態度をとり、使者を追い返してしまいます。

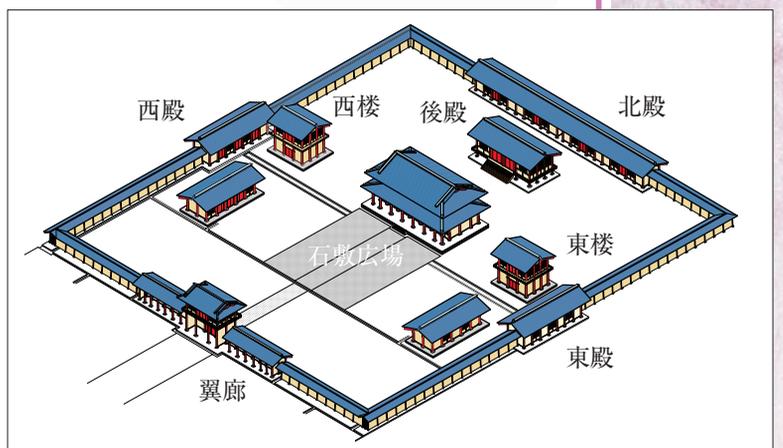
その後、東海道節度使、仁部卿などの重要ポストを歴任し、天平宝字6年(762)12月1日、兄の真先・久須麻呂らとともに参議となり、親子4人が国政を動かす地位につくという異常な事態となります。

このような中、淳仁天皇を擁する仲麻呂、朝鴉親子らに対抗するように、孝謙上皇は僧の道鏡を重んじ始め、主導権をめぐる対立が表面化します。

天平宝字8年(764)9月、仲麻呂が反乱を企てていることが発覚、朝鴉の兄、久須麻呂が陸奥国牡鹿郡出身の牡鹿嶋足に討たれます。朝鴉は父仲麻呂らとともに平城京を脱出し、近江国府(滋賀県)で再起を図ろうとしましたが、国府手前の勢田橋を壊され、進路を絶たれてしまったため、弟・辛加知が国司を務める越前国(福井県)を目指そうとします。しかし、ここでも先手を打たれ、行く手を阻まれた朝鴉らは、近江国高島郡(滋賀県高島市)に退き抵抗を試みますが敗れ、父仲麻呂とともに命を絶たれました。仲麻呂の反乱発覚からわずか一週間足らずのことでした。

桃生城跡

石巻市河北町飯野の、標高80mの丘陵上にあります。発掘調査の結果、東西800m、南北650mを土塁で囲み、東よりに政庁跡が確認されています。



多賀城第Ⅱ期政庁(宮城県多賀城跡調査研究所提供)

藤原朝鴉によって大々的に改修された政庁です。建物や築地塀は礎石式となり、築地塀にも瓦が葺かれました。新たに東西の楼、後殿などが加わり、南門の左右には翼廊が付きまます。4時期の政庁の変遷のうち、最も豪華な造りでした。

大伴家持

(718?～785)

平城宮の東、佐保と呼ばれる地で大伴家持は生まれました。祖父の安麻呂、父の旅人いずれも大納言という、名門の家柄です。

天平17年(745)、従五位下の位を与えられた記事によって、初めて記録に登場、その後越中国(富山県)の長官や兵部省の次官などを歴任します。この頃中央では藤原仲麻呂が絶大な権力を握り、古来よりの氏族は力を失いつつありました。大伴氏も例外ではなく、家持にとつても不遇な時代が続きますが、宝亀元年(770)、光仁天皇の時代になり、中央政界に復帰します。

宝龜11年(780)、陸奥国上治郡(宮城県栗原市)の長官であった伊治公些麻呂が、伊治城で按察使紀広純を殺害し、次いで多賀城を襲撃・放火するとい



大伴家持像(高岡市万葉歴史館提供)
高岡市二上山頂にあるブロンズ像です。家持は天平18年(746)、越中国(富山県)の守に任ぜられ、赴任しました。

う大事件が起こり、陸奥国は混乱状態に陥ります。この時、事態の收拾を任されたのが家持でした。延暦元年(782)に按察使兼鎮守将軍、同3年には持節征東將軍に任命され、蝦夷政策の全権を担って多賀城に赴任します。翌延暦4年4月には、緊急事態に備え、多賀・階上二郡を仮の郡から真郡にするよう政府に要請するなど、依然不安定な多賀城近辺の復興と整備に力を注ぎます。しかし、蝦夷に対しては積極的な制圧を行えないまま、同年8月28日亡くなりました。

ところが死後20日あまりの後、長岡京造営の責任者であった藤原種継の暗殺事件が起こり、家持も関与したということで、官位を奪われ、私財も没収されるなどの厳しい処分が下されます。名誉が回復され、位が元に戻るのは、桓武天皇の死の直前、大同元年(806)3月になってからのことでした。

家持は官人である一方、万葉集に最も多くの歌を残した歌人であり、その編者とも言われています。

新しき、年の始めの、初春の

今日降る雪の、いや重けま事

めでたさの象徴である雪が降りしきるように、良い事が重なってほしいとの願いがこめられたこの歌は、天平宝字3年(759)元日に因幡国府(鳥取市)



大伴家持歌碑

万葉集巻18に収められた「陸奥国より金を出せる詔書を賀く歌一首并に短歌」のうちの短歌「大伴の遠つ神祖の奥つ城は著く標立て人の知るべく」と刻まれています(多賀城市文化センター内)。

佐保路

東大寺転害門から大伴氏の邸宅があった佐保路を望んでいます。



で家持が詠んだものです。この一首をもつて万葉集は締めくくられました。この後、家持の歌は残されていません。

名門大伴氏の長として軍事的・政治的に大きな功績を残せず、官位においても祖父や父に及ばなかった家持ですが、万葉集の成立に果たした役割は計り知れず、その名を不朽のものとしています。

さかのうえの たむら まろ
坂上田村麻呂 (758～811)

征夷大將軍坂上田村麻呂が活躍したのは平安時代の初めで、その主な舞台は現在の宮城県北から岩手県南にかけてでした。当時、多賀城が治める陸奥国の北には、中央政府の支配に入らない蝦夷の住む大きな地が広がり、その地を支配することは、政府の最大の目標でした。多賀城はその役割を担う機関でもあったのです。

支配を強化してきた政府に反発し、宝亀5年(774)、蝦夷が桃生城(宮城県石巻市)を襲ったのをきっかけに、約40年にわたる戦乱の時代が続きます。その中で、延暦10年(791)、田村麻呂は征夷副將軍に任命され、初めて陸奥国との関わりをもちます。

その後、延暦15年には按察使・陸奥守・鎮守將軍の三官を兼任、さらに翌16年には征夷大將軍に任命され、対蝦夷戦争における最高責任者となります。そして延暦20年(801)、胆沢(岩手県奥州市)の首長阿弓流為・母礼を降伏させ、長期

にわたった戦争を終結に導きました。数々の功績を挙げ、大納言にまで昇進した田村麻呂は、弘仁2年(811)、平安京において54歳の生涯を閉じました。立ちながら甲冑を身につけ、武器を携え、東、すなわち陸奥へ向かって葬られたといえます。また、その墓は、国家の非常時にはまるで鼓を打つような、あるいは雷鳴のような音で警告を発したといえます。



坂上田村麻呂像(石巻市零羊崎神社蔵)
中世の作と伝えられている木像です。この像が安置されている零羊崎神社は、陸奥国牡鹿郡の延喜式内社で、北上川河口に近い、石巻市牧山山頂に鎮座しています。



八幡神社
田村麻呂創建と伝わるこの神社には、次のような伝説があります。都からさらわれてきた貴人の娘、悪玉御前の子供千熊丸が、八幡神社の流鏑馬に出ることを拒まれます。その後坂上田村麻呂の子であることを知った千熊丸が、形見の鏑矢を携えて都に上り、父と対面したということです。

死後も都と天皇を守るべく、厚い信頼を寄せられた田村麻呂とは、どのような人だったのでしょうか。記録には怒れば猛獣もおれ、笑えば幼子もなつくと記され、180cmの長身で赤ら顔、目は澄んで鋭く、黄金色のあご髭が豊かであったといえます。蝦夷との戦いを収束させた「英雄」田村麻呂のイメージは、後世生み出された多くの伝説によって、広く浸透していきました。また、京都の清水寺をはじめ、田村麻呂創建と伝える寺社が全国に存在し、その武勇はさまざまに形で受け継がれ、今に至っています。

源 融

みなもとの とおる

(822~895)

源融は、源氏物語の主人公である光源氏のモデルとされている人物の一人です。融は、弘仁13年(822)、嵯峨天皇の第八皇子として生まれ、承和5年(838)、源の姓を与えられ、同時に当時の天皇であった仁明天皇の養子になります。このような経歴から、光源氏のモデルとみなされたのでしょうか。貞観6年(864)3月、中納言のまま、陸奥出羽按察使に任命され、この時始めて陸奥国と関わりをもつこととなります。その後大納言から左大臣へと昇進し、元慶8年(884)、陽成天皇が廃位した時に皇位継承を望んだものの、融を超えて太政大臣に就任した藤原基経に退けられるなど、政治的にはままならないことも多かったようです。



能「融」

一方、文化人と

しての名声は高く、鴨川のほとりに「河原院」と呼ばれた広大な邸宅を構え、陸奥国塩竈の風景を模した庭を造りました。そこにはみちのくの歌枕のひとつ、「離ノ島」もあり、さらには難波から海水を運ばせて藻塩を焼かせるなど、風流かつ贅沢極まりない生活をしたと伝えられています。

こうした風流ぶりや河原院をめぐる逸話は、その後の文学作品にも取り上げられ、能「融」のモチーフともなりました。按察使に任命された融が多賀城に赴任したかどうか、定かではありません。しかしみちのくの風景を愛でた融の伝説は、いつしか地元にも根付きました。市内には、通称「大臣宮」と呼ばれる小高い丘がJR東北本線高平踏切の南東にあり、かつてここには「大臣宮」と刻まれた石柱が立っていました。現在その丘は失われてしまいましたが、石柱は線路南に安置されています。それ以前には石の祠が祀



石の祠 (浮島神社境内)

「多賀城古址の図」(明治22年)に描かれた大臣宮



られていたとのことで、これは現在、浮島神社に合祀されています。この石柱に刻まれた「大臣」こそ、左大臣源融ではないかとの言い伝えが江戸時代の記録に残っています。

また、塩竈市内には融ヶ岡(塩竈市泉ヶ丘)と呼ばれる場所もあり、多賀城近辺には融の面影が今なお生き続いています。

源義家

(1039～1106)

文武両道に秀でた英雄として名高い源義家は、前九年の役で活躍した源頼義の嫡子として長暦3年(1039)に生まれました。石清水八幡宮(京都府)

で元服したことから、八幡太郎とも呼ばれています。

義家が歴史の表舞台に出てくるのは、永承6年(1051)、陸奥国で起きた安倍氏の反乱を鎮めるため、父頼義に従って出陣した前九年の役からです。この戦いで頼義・義家親子は苦戦を強いられながらも、出羽国(秋田・山形県)の豪族清原氏の応援に

よって安倍貞任を破りました。義家は乱を平定した功績で出羽守に任ぜられ、父の死後、源氏の棟梁を継ぎます。前九年の役から21年後の永保3年(1083)、陸奥守として再び陸奥

国にやってきた義家は、安倍氏に代わり勢力を伸ばしていた清原氏の内紛に介入します(後三年の役)。

この戦いで義家は、清原清衡(後の藤原清衡)に加勢し、寒さと食糧不足に悩まされながらも勝利します。ところが、この合戦は清原一族の内乱にすぎないとみなされたため、朝廷からの恩賞は得られません。義家は、苦しい戦いをしてきた東国の武士達に自分の財産をなげうって恩賞を与えたい、後に源頼朝が平氏打倒の兵を挙げた際、東国武士がいち早く駆けつけたのも、その時の恩義を感じてのことと言われています。

後三年合戦絵詞

(模本 一関市博物館提供)

嘉永4年(1851)に京都出身の画家高倉在孝によって描かれたもので、義家軍が清原家衡、武衡の籠る金沢柵へ行軍中、雁の列の乱れを見て、清原軍の伏兵を察知したという有名な場面です。なお、後三年合戦絵詞(東京国立博物館蔵)は、序文により、貞和3年(1347)の製作であることが知られています。

その後、義家は後三年の役で本来の職務を怠ったため、新たな官職に就くことができず、位もそのままに据え置かれてしまいます。後三年の役から11年後の承徳2年(1098)によりやく昇進するものの、嫡子義親の謀反や一族同士が争うなど苦境に立たされた中、嘉承元年(1106)、68歳でこの世を去りました。



八幡神社

坂上田村麻呂の創建といわれ、元は末の松山の西方、古館の地にありましたが、鎌倉時代、現在の宮内に移されたと伝えられています。前九年の役の際、義家が鞆を奉納し戦勝祈願をしたことから、鞆八幡とも呼ばれています。



勿来の関

義家の和歌にも詠われている歌枕で、所在地には諸説あり、宮城県利府町の名古曾もそのひとつです。「奥州名所図会」(19世紀初)にも描かれ、現地には「勿来神社」の碑が建っています。

武勇の面で語られることの多い義家ですが、『千載和歌集』には

吹く風を なこそその関と 思へども

道もせにらる 山桜かな

という歌が載せられています。

鎌倉幕府を開いた源頼朝、室町幕府を開いた足利尊氏の祖先にあたることから、武将の理想像としてさまざまな伝説や逸話が生まれ、今日まで語り継がれています。